

10歳未満の子どものセルフ・コントロールと非行、問題行動改善のためのセルフ・コントロール介入

Alex R. Piquero, Wesley G. Jennings, David P. Farrington

要旨/要約

背景

セルフ・コントロール向上プログラムは、多くの目的を果たすよう意図されているが、セルフ・コントロール向上がその最たる目的である。しかし、こういった介入は非行や問題行動の低減を目的としていることも多い。しかしながら、これらのプログラムがセルフ・コントロールの向上や非行や問題行動の低減に効果的かどうかについての包括的な報告書は、現時点では入手できない。

目的

本レビューの主たる目的は、セルフ・コントロール向上プログラムがセルフ・コントロールや非行、問題行動に対してもつ効果についての入手可能な調査研究のエビデンスを評価することである。早期のセルフ・コントロール向上プログラムの全体的な効果を調べることに加えて、本レビューでは、これらのプログラムが最も成功を収めるような状況的背景についても、可能な限り検討する。

探索戦略

適格性基準を満たす文献を網羅的に探索するため、次のような戦略を採用した。(1) キーワード検索を多くのオンライン要旨データベースで実施した。(2) 幼少期児童に対する、一般的な予防/介入プログラム、およびセルフ・コントロール改善に特化したプログラムについての先行レビューの参照リストが調査された。(3) 当該分野における主要ジャーナルについて手作業での探索が行われた。(4) 研究所や専門家の出版物が探索された。(5) セルフ・コントロール改善プログラムという特定の分野において知識が豊富な、様々な分野の著名な学者(専門家)にコンタクトを取った。

探索基準

セルフ・コントロールの改善、及び/または、非行や問題行動の低減についての実施さ

れる早期のセルフ・コントロール改善プログラムの効果を調査した研究が含まれた。実験群と統制群の間のセルフ・コントロール及び/または非行及び問題行動の事後調査を提供する無作為統制評価デザインを採用している研究のみが含まれた。

データ収集と分析DATA COLLECTION AND ANALYSIS

本レビューに含まれた34件の研究について口述された知見が報告されている。これら34件の研究の全てについてメタ分析が実施された。効果量を測定するため、平均と標準偏差が大部分で用いられた。バイアスのかかっていない効果量と、重み付けのされた効果量、可能であれば、アウトカムのソース（親による報告、教師による報告、直接的に観察した者による報告、自己報告、クリニックによる報告）を超えた比較について、結果が報告された。単回帰分析と重回帰分析（Lipsey & WilsonのSPSS macrosを用いて）が、効果量の潜在的媒介変数と予測変数をそれぞれ決定するために、実施された。

主な結果

セルフ・コントロール改善プログラムはセルフ・コントロールの改善、及び/または、非行や問題行動の低減にとって有効な介入であり、これらのプログラムの効果の頑健性は、様々な重み付け手順や、文脈、アウトカムのソースを超えて、さらに刊行データと未刊行データの双方に基づいて、高いように思われるということはこの体系的レビューに含まれた研究は示している。

著者らによる結論

セルフ・コントロール改善プログラムは、セルフ・コントロールの改善、及び/または、非行や問題行動の低減のために、セルフ・コントロールが相対的に決定され、それ以上悪くもならないとGottfredson と Hirschi が主張する年齢分岐点である10歳になるまで、使用されるべきであると我々は結論づける。このような結果を考慮し、セルフ・コントロール改善プログラムの時間に渡る効果や、ライフコースにおける異なったステージ（例えば、中青年期や青年期など）に渡っての効果を検討し、これらのようなプログラムの費用便益分析を精力的に行うための努力を将来的には行うべきであろう。